

◆『Intelligence』購読会員の皆さまへ：ニュースレターNo. 70（2020年4月号）◆20世紀メディア研究所は、本年設立二十周年を迎え、機関誌『Intelligence』も20号を刊行いたしました。これまでのご厚誼に感謝を申し上げ、引き続きよろしく御支援、ご鞭撻たまわりますよう、お願い申し上げます。コロナ惨禍のもと巣ごもりのゴールデンウィークを迎え、皆様には何かとご不自由な日々を過ごされているかと存じます。いかがお過ごしでしょうか。ニュースレターは3月号を欠号といたしましたが、今月よりまた配信を始めます。研究を途絶えさせないという意図のもと、4月の研究例会はZOOMにより開催いたしました。最初の試みということで、試行錯誤ではございますが、どうぞしばらくはこの形態の研究會運営により多くご参加いただけますよう。ご愛読の会員の皆さまには、ニュースレターとともに「Intelligence」会員専用ウェブサイト <http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> また、会員向けブログとあわせてご覧いただければ幸いです。皆さまからのご意見、ご要望をお待ちしております。

【ブログ用エッセイ募集】

会員向けブログでのエッセイは、お楽しみ頂いていますでしょうか。会員向けブログでのエッセイは回を重ね、第38回号には名倉裕一さんが「恒石重嗣」についてご寄稿下さいました。これまでも国内外の多くの方から研究上の興味深い逸話をご執筆いただいております。このブログのエッセイの執筆希望者を、購読会員の中から募っております。研究に関する小話やヒント、資料紹介などを会員向けブログに掲載なさりたい方は、原稿をお待ちしております。原稿の長さは千字程度、写真を二葉そえてご提出下さい。詳しくは、事務局までご連絡下さい。

また、この度、ブログ原稿から30篇を選んで文生書院より『20世紀メディアよもやま話』を刊行いたしました。こちらもあわせてよろしくお願ひ申し上げます。

【第135研究会】（4月25日（土）午後2時30分～5時）

・佐藤雪絵（早稲田大学大学院政治学研究科博士後期課程）

「朴正熙政権と人権：国際人権擁護韓国連盟と機関紙『国際人権報』をてがかりに」

1953年に「大韓人権擁護連盟」として設立された国際人権擁護韓国連盟の変遷と、1968年に創刊された機関紙『国際人権報』を紹介しつつ、朴政権における「人権」が対サハリン僑胞、対原爆被害者、対在日韓国人への注目などのフェーズにおいてどのような言説を形成したかを報告した。対外的、国際的な「人権」言説の発信と、国内的、体内的な「人権」抑圧の二重構造についての質疑などが提出された。

・本橋龍晃（立教新座中学校高等学校教諭）

「三島由紀夫イメージへの一視角—終戦直後の女性誌を視座にして—」

三島由紀夫が初期の作家活動において、女性誌を舞台に、「貴族」的、優秀な「官僚」といったイメージ形成をどのように展開していたのかを論じた。このようなイメージが魅力的な異性愛者という演技を伴っていたこと、さらにこうしたイメージはいつ頃どのように切断されたのか、などが、質疑において議論された。

●5月以降の20世紀メディア研究会の開催は、2020年5月30日（土）太田奈名子氏（日本学術振興会特別研究員（PD）、東洋大学非常勤講師）「占領下ラジオが伝え紡いだ「人間」天皇—投書番組『真相箱』・オペレッタ『ミカド』・雑誌『ライフ』の接続から考える—」、国枝智樹氏（上智大学文学部新聞学科）「初期のメディア・リレーションズ史—1870～90年代までを中心に」、以後、6月27日（土）、7月18日（土）に予定しております。研究会でのご報告御希望の方は、20世紀メディア研究所事務所 m20th@list.waseda.jp まで、メー

ルにてご一報下さい。当面、ZOOM オンラインにて研究会例会の開催を維持してまいります。よろしくご協力たまわれますようお願い申し上げます。

●例年『Intelligence』誌の投稿論文締め切りは9月末日としておりましたが、今年は国会図書館をはじめとする図書館、アーカイブの閉館が続いておりますため、締め切りを11月5日に延期いたしました。投稿をお待ちしております。

【コラム：ZOOM 研究会事始】

文学研究者の日常は一人で文献と向かい合うことが多いとはいえ、週に一度は出かけていた劇場が次々と閉まり、映画館も閉館となり、演劇や映画に携わる友人知人の顔を思い浮かべては暗澹たる気持ちになる。朝晩、エコーが効きすぎる町内放送が、不吉な響きで「緊急事態宣言が発令中です」とアナウンスしている。書齋に届くその声を聞きながら、人は思いのほか集って暮らしていて、それが文化なのだ痛感させられる。都市空間と文化についてのアプローチを修正しなければなるまい。そんな中、研究の流れを途絶えさせない、という共通の思いを胸に、20世紀メディア研究所オンライン研究会の実施に踏み切った。研究所創設二十周年記念、機関誌『Intelligence』20号刊行の記念の年は、文字通り新しいメディアを活用したオンライン研究会の始まりの年にもなったのである。

ZOOM は、大学が契約した大容量のもの、現在の水準ではセキュリティについても最も意を尽くしたものになっているという。

初めてのことで、進行のリハーサルも繰り返行われた。ミーティング ID、パスワードも使い回しせず、そのつど立ち上げるので、混乱する局面もあった。ZOOM ウェビナーは、発表者、パネリスト、ホスト、司会者以外は顔が見えないため、発表者は反応が掴めずに不安を漏らした方もいる。観衆の側からすると、画面に目と耳を集中させて緊張感が続くので、むしろふだんより疲れる、肩が凝るという感想もあった。ベンヤミンの言うように、五感のはたらき、身体（触覚的まなざし）がはたらくようにするためには、「気散じ」「くつろぎ」の姿勢が必要なのだろうが、いまはまだ慣れない。

とはいえ、オンラインの研究会参加者は40名を越えて50名弱、その後のオンライン懇親会（これがなかなか楽しい）にも十数名の参加者を得た。むしろこの機会に、海外や地方在住の方の参加を得られたことは、研究者のネットワーク作りとして、肯定的な成果だと考えたい。

国際学会や、大規模な学会があいついで中止される中で、とくに若手の研究者の間で、発表の場を求めて困惑する向きが多いとも聞く。20世紀メディア研究所は、今後とも柔軟にツールを駆使して、発表と懇親の場を提供できるように努めたい。

[4月26日付 文責：川崎賢子]